

研究課題	つながる力、挑戦する力を育むキャリア教育
副題	ICT のチカラを「借り」て、新時代を生き抜くキャリア形成を促す
キーワード	主体性、表現力、聞く力、社会性、挑戦力
学校/団体名	相楽東部広域連立 和束小学校
所在地	619-1201 京都府相楽郡和束町園神定 5 7
ホームページ	http://www.kyoto-be.ne.jp/watuka-es/cms/

1. 研究の背景

本校は茶源郷と呼ばれる美しい町、和束町唯一の小学校である。本校では、少子化・都市化の影響による児童数の低下が著しく、全校児童 121 人、全学年単学級で、中学を卒業するまで 9 年間学級のメンバーが変わらない。また、都市部より遠く離れた山間部に位置するため、児童達は町外に出ることは少なく、他校の児童と関わったり、外部からの新たな情報を得たりする機会が少ない。また、幼少期からメンバーが変わらない学習集団であるために、クラス内のヒエラルキーも固定化され、「きっと〇〇さんがやってくれるだろう」と予測しがちで、その中で、様々なことに前向きにチャレンジする機会が限定されている。

これからの時代はいわゆる「21 世紀型スキル」（本校研究においては「人生とキャリア設計」「コミュニケーション」「コラボレーション」「情報リテラシー」）の育成が求められている。それは地方に生きる子ども達も同様である。複雑で困難な課題に対して多様な人たちと協働して解決していく資質・能力が求められることは間違いない。

そこで、テクノロジーを教育活動に最適化した上で、キャリア教育の研究活動に生かす。多様な人達との豊かな関係の構築、ICT を媒体に児童同士が主体的に対話する機会を創出し、将来を見据えたキャリア形成における資質・能力の向上を目指したい。

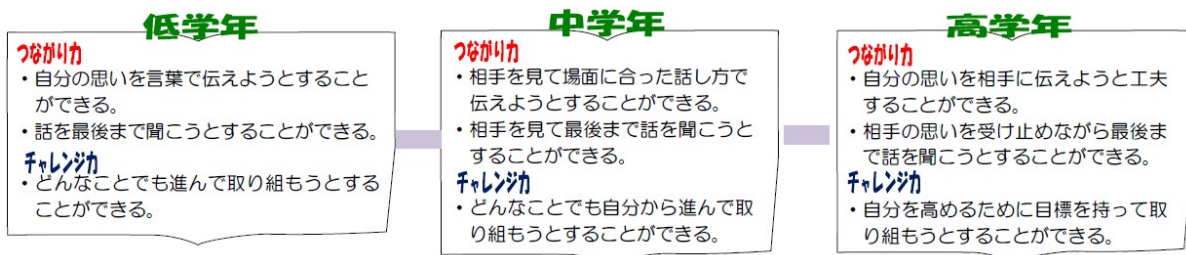
2. 研究の目的

研究の背景を踏まえて、本校では、「キャリア教育」を重点領域と位置づけ、「豊かな表現力を身につけ、主体性を発揮し目標に向けて挑戦し続ける児童の育成」という研究目標を掲げた。これまでのキャリア教育のイメージでは、「職業体験」というキーワードを思い浮かべるかもしれないが、それは全体像の一部である。どんな力をつけるかという視点で見たときにキャリア教育とは、社会を生きる児童たちに「基礎的・汎用的能力」を育むことである。本校では、その中で「人間関係形成能力」（つながる力）と「キャリアプランニング力」（チャレンジ力）に重点を置くことにした。

下記の 2 点が本研究を通して、児童に身に付けさせたい力である。

- 1) 思いを伝え合うコミュニケーション能力を身に付ける。（つながり力）
- 2) 自分で考え、主体的に自己決定し、挑戦できる（チャレンジ力）

<各ブロック学年の具体的目標>



上記の力を育むために、ICT 機器を活用し、キャリアの視点を組み込んだ特別活動の推進や授業力の向上を図る。

地方の山間部で生活する児童達にも、Society5.0 時代においても普遍的であり必要な力である「つながる力」「挑戦する力」を育成し、未来に前向きな展望をもたせつつ、キャリア形成を促していきたい。

3. 研究の経過

①時期	②取り組み内容	③評価のための記録
6月中旬	キャリアパスポート ・個人をめざす姿、学期目標設定（毎学期初めに記入、学期終わりにふり返り） ※毎学期実施のため以後省略	ワークシート（児童）
6月19日	児童の実態把握・分析→年間指導計画作成 ・自己評価をアンケートで調査、データを可視化し、学校全体・学年・個人の実態を分析し、年間指導計画を立てる。	アンケート調査（児童） グラフ化されたデータの教師による所感
7月 2日	①ハイブリッド型一年生を迎える会 ・1、6年生は対面、その他の学年は各教室からリモート参加。（つながり力）	写真・ワークシート（児童）
6月～7月	②他校児童とのリモート交流学习 ・近隣校2校との交流学习を全学年リモートで実施。（つながり・チャレンジ力）	観察記録・写真・ワークシート（児童）
9月15日	校内授業研究会 ・6年総合的な学習の時間「自分探しの旅」（チャレンジ力）	観察記録・写真・ワークシート（児童） 教師による所感
10月～12月	②他校児童との交流学习 ・対面、リモートでの実施（学年による）（つながり・チャレンジ力）	観察記録・写真・ワークシート（児童）
10月1日	児童の実態把握2回目・分析 ・1回目との比較調査。その変化を分析し、成果・課題を共有、計画を修正。	アンケート調査（児童） グラフ化されたデータの教師による所感（教師）
11月19日	③ハイブリッド型公開研究発表会 ・研究発表と講演は対面・リモートで実施。当日の参加応募や授業、研究の感想や質問をオンライン（Microsoft Forms）で実施。（つながり・チャレンジ力）	観察記録・写真・ワークシート（児童） 教師による所感 参加者からの感想（紙・オンライン）
2月～3月	児童の実態把握3回目・分析	
3月3日	研究の総括・次年度の方向性 ・各部（授業づくり部、カリキュラムづくり部）ごとに成果、課題を挙げ、次年度の方向性を検討。	教師による意見集約（Microsoft Teams を活用した共同編集） →意見共有の時間を短縮、次年度に向けての議論の質が向上。

上記の取り組み以外にも、リモート全校朝の会や、動画での学校紹介などの活動をする一方、定期的に ICT 活用研修を校内で実施し、教職員全体の活用力向上を図った。また、取り組みや行事について、Microsoft Forms で児童や保護者・教職員へアンケート調査を行い、その結果を事後の取組に生かした。

4. 代表的な実践

（タイトル末にある「※番号」は「3 研究の経過」とリンク）

(1) ハイブリッド型一年生を迎える会 ☆つながり力 ※①

本校では、一年生を迎え入れるために、年度初めに本取組を実施しているが、今回は緊急事態宣言明けのため、中止の方向であった。しかし一年生にとっては、初めての小学校生活、内容を変更してでも実施し、異学年間の「つながり」を大事にしたいと考え、リモートでの実施をすることにした。



財団の助成で購入した iPad とモニターを体育館や教室などに設置し、ビデオ会議システム「ZOOM」を活用するという、内容を再検討した。

当日は、体育館で披露される各学年から一年生へのメッセージや学校紹介を体育館で直接見ている一年生に披露すると共に、他学年にはオンラインでライブ配信し、発表の感想などの双方向の交流も行った。

ネットワーク環境の課題もあり、スムーズに接続できない場面も見られたが、各学年の発表や一年生の感想などを全児童が聞くことができ、本校の良さである異学年間の「つながり」と表現力育成のために、大事なスタートを切ることができた。



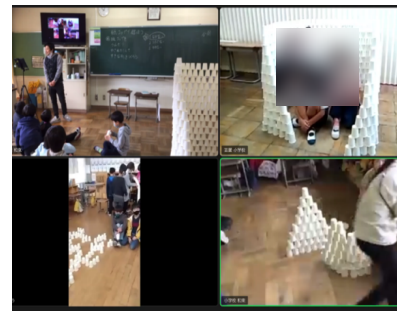
(2) 他校児童とのリモート交流学习 ☆つながり力、チャレンジ力 ※②

本校では、数年前から学期に1～2回程度、近隣小学校児童との交流学习を全学年が実施している。「研究の背景」に述べたように、就学前から中学校卒業まで十数年間単学級の児童達にとっては、同世代の他の学校の児童と交流することは、それ自体が「チャレンジ」な活動であり、その活動を通して、多様な子ども達との「つながり」をつくる意味でも、本活動は重要である。コロナ禍で中止・延期も考えられたが、全学年リモートで実施することに決めた。(ちなみに、これまではほとんどが学校を行き来しての対面での交流学习であった。) 具体的な実践事例を紹介する。

◇3年 図工「紙コップで作品をつくろう」

大量の紙コップを使ったグループ創作。他校2校のグループが制作する様子をオンラインで相互に確認しながら、それぞれのアイデアを交流したり生かしたりした。

完成後の作品紹介の場面では、モニターを通して、お互いの作品について感想を交流した。児童からは、「オンラインでも、同じ活動をして楽しかった」と感想が述べられ、他校児童と「つながり力」を育む機会となった。



◇4年 国語「夏の俳句をつくろう」

当日オンラインでの交流学习の前に、事前に各校で「夏」をテーマにした俳句をグループで考え、それを短冊シートに書き、関連する写真などを準備した。そして、当日それぞれが創作した俳句をカメラに写しながら読み上げ、その俳句をつくった理由や、それぞれの感想を交流した。

オンラインではあるが、児童によっては少し緊張感も見られる中での発表交流となり、挑戦する良い機会となった。



◇6年 総合的な学習の時間「Teams で自己紹介をしよう」

オンラインでの交流学习を進める中で、一つ課題が浮かび上がった。それは、対面時の学習に比べ、「他校児童と交流する時間が量・質ともに不十分」ということであった。そこで、Microsoft Teams を活用し、オンライン上で三校の児童を4～5人のグループに振り分け、テキストチャットで交流を図る活動を実施した。本校では、交流をしている2校の小学校と修学旅行を一緒に実施している。その前段階として、グループチャット機能を活用し、それぞれの趣味や興味などについて交流をすることにした。

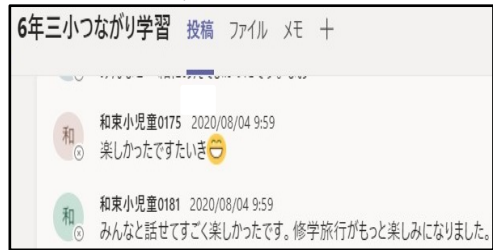
各学校の様子を ZOOM で配信しつつ、PC ルームにあるパソコンを活用し、児童一人一人が各トピックについてメッセージを書き込んでいった。タイピングスピードが十分でない



児童は、少し手間取った場面もあったが、大多数の児童は、他校児童とのチャットでの交流を楽しむことができた。本活動では、これまでのリモート学習（各校 iPad&モニター 1台ずつしかオンラインでつながっていないため、一度に交流できるのは、1～4人）では実現できなかった一人一人の交流の時間を確保することができた。

学習の振り返りでは、「リモートでも話すことができて良かった」など、楽しみながら「つながり」を感じられる活動となった。

□児童の感想



(3) **ipad や Office365(主に Teams)を活用し、対話的な学びの促進を日常化 ☆つながり力**
 本校の課題でもある人間関係の固定化。その中で「対話的な学び」（つながり力）を促進するために ICT 機器や Teams などのコラボレーションアプリを活用した。

1 **ipad のカメラ機能の活用**

日常的な授業では、iPad（8台しかないため班に1台）で国語の表現活動や体育の実技、理科の実験等を記録し、その映像をきっかけにすることで、課題発見や情報共有、具体的な助言等の相互のやりとりの質や量を向上させた。

□実験を動画で記録



2 **Microsoft Teams の授業への活用**

Teams を活用して、発言者が固定化される傾向にある「発展的な課題」に対しても一人一人の意見をテキストでチャット化し、「個々の思考の見える化」を図った。例えば、「理科の実験後の結果・考察共有」「道徳の中心発問の意見交流」や、「読書感想交流」、「6年生送る会の劇のシナリオのグループ創作」（Teams 上で Word ファイルで同時編集）などがある。

□理科の考察を同時編集

水(100ml)	結果から考えたこと
5	塩の方が、よく溶けて、溶けるスピードも限りがある。
4	全部溶けるには時間がかかる。
4	食塩は18g ミョウバンは4g以上溶けなかつた分かった
3	塩は8はいだから溶けやすかった。ミョウバ

紙やホワイトボードで交流するとき比べ、グループや一部の児童以外の考えも共有されているため、より多様な考えがあることに触れられることで、対話的な学びを促進させる取り組みとなった。

(4) **ハイブリッド型公開研究発表会 ※③**

2年間の研究の手法やその成果・課題を広く発信するにあたり、コロナ禍の中であったが中止という形はとらず、オフラインとオンラインを使い分けたハイブリッド型で公開研究発表会を実施した。また、オンラインを活用することで、参加者と双方向で学び合う新しい形の公開研究発表会を目指した。

□研究発表をライブ配信



<ハイブリッド型公開研究発表会の概要>

内容\形式	オフライン	オンライン	所感
参加申込書	× (脱 FAX)	○ (Microsoft Forms)	参加申込フォームを活用し、事前に参加者の関心内容を一部把握することができた。
研究内容の事前公開	×	○ (学校 HP 上で公開)	通常のアクセス数より 1日あたり 10～20件増加した。
公開授業	○	×	
研究発表・講演	○	○ (ZOOM で配信)	コロナ禍で人数制限がある中で、総参加者(40人)中、7人がリモート参加
感想や質問	○	○ (Microsoft Forms)	質問を当日中に返答するなど、参加者と双方向のコミュニケーションもできた。

研究発表会のオンライン化は本校の歴史において初の試みであった。参加者にとっては、オンラインでの感想や質問入力が不慣れだったのか、回答数は多くはなかったが、これまで

にない新しい手法を域内・外に広く発信できた。

オンライン参加者の意見には、「オンラインでも研究発表がしっかり聞けて、十分内容が理解できた」「音声がとてもクリアでどのような環境で行ったか知りたい」など、好意的な意見を多くいただいた。

今回はコロナ禍において一気に研究発表会のオンライン化が進んだが、アフターコロナにおいても、研究内容等をより広く発信し、双方向型の公開研究会にするためには、ハイブリッド型は大いに期待できるであろう。

リアルタイムで質問募集
(Microsoft Forms 活用)

最新の回答
 *3年の授業で、菊井先生の話にもあった教科をまったく視点で見ると...
 *キャリア教育に力を入れてきて、現在で日常生活などに子どもた...
 *最後のまともに中学校とも連携をとっておしやっておられたのですが...

5. 研究の成果

(1) 「育みたい力 ①つながり力 ②チャレンジ力」について (児童アンケート結果より)

※A層の増減で評価 「そう思う」(A層) 「どちらかと言えばそう思う」(B層)

1～3年の「話すこと・聞くこと(つながり力)」が1～3%、「挑戦(チャレンジ力)」が4%増加。また、4～6年の「聞くこと(つながり力)」が1回目調査より10%増加。

(図①, ②)

上記の結果に結びついたと考えられる実践研究として以下の3点を挙げる。

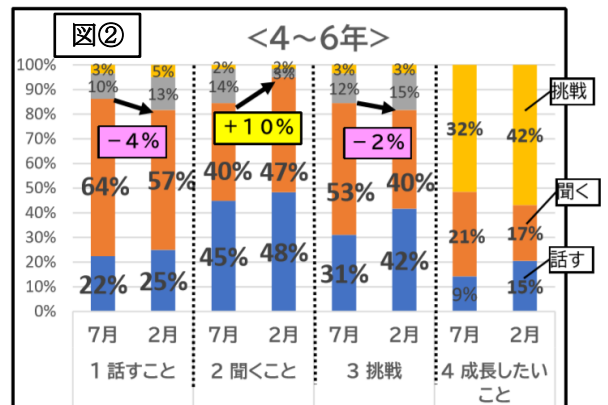
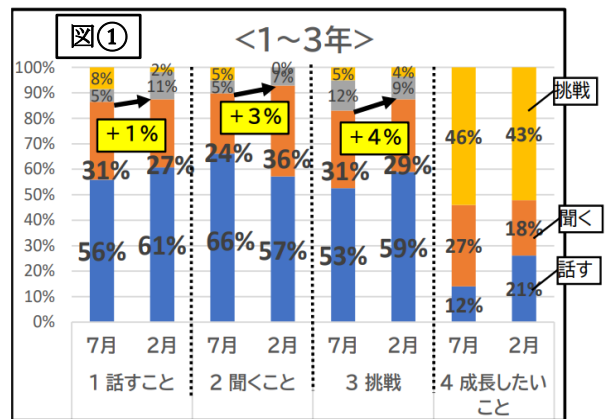
- ①カリキュラムづくり部において、担任と担任外のペアで計画したキャリア教育年間指導計画(図③)を活用し、複数の領域や単元を貫いて「つながり力」を軸にした活動に取り組むことができた。
- ②授業づくり部で考案した「ペアトーク」「グループトーク」を授業中の話し合い活動の場面で活用した。
- ③コロナ禍においても、「一年生を迎える会」や「他校との交流学習」などを中止することなくリモート形式で取り組むことができた。

(2) 教員の ICT 活用スキルの向上・マインドセットの変化

校内研究において、Forms を活用した教員の意識調査、Teams の同時編集を活用した取組の成果共有など、徐々に教員の ICT 活用力向上や ICT に対するマインドセットが変化してきた。手段としての活用を進めることで、明らかに職員の ICT 活用に対する意識が変わり、それが結果的には授業での ICT 活用促進につながった。現在では約半数の職員が会議中は iPad を使用し、授業で iPad を使用時に予約する使用表では、一日のほとんどをいずれかの学年が使用している。

また、職員間で自然と、「この調査は Forms を活用した方がいいのでは?」「授業でプレストをしたいから、Teams の使い方を教えてほしい」など、学年や年齢を越えて交流が頻繁に行われ、職員全体の雰囲気は1年前と大きく変わってきている。

□生き方アンケート



図③ 令和2年度 第4学年 キャリア教育 年間指導計画 学年のめあて

項目	6	7	8	9	10	11	12	9学期
つながり力	相手を見て場面合った話し方で伝えようとする。							
自己発見力	自分の良さに気づき、弱さを認めよう。							
チャレンジ力	どんなことにも挑戦しよう。							
教科	国語「夏の言葉」	国語「夏の言葉」	国語「夏の言葉」	国語「夏の言葉」	国語「夏の言葉」	国語「夏の言葉」	国語「夏の言葉」	国語「夏の言葉」
生活	「結果目標達成」になるよう、結果の振り返りなどの場面で、解決策を考案し実践する。							
行事	運動会 練習の成果を発表しよう。全校で力を合わせよう。							

6. 今後の課題・展望

(1) 課題

◆「育みたい力 ①つながり力②チャレンジ力」について

4～6年の「話すこと（つながり力）」が5%、「挑戦（チャレンジ力）」が3%減少。

上記の結果になった理由の仮説として以下の3点があげられる。

①校内研究授業の単元構想を作成する際につけたい力（つながり力、チャレンジ力）を各ブロック学年（低・中・高学年）に振り分けることにし、中・高学年は「つながり力」を軸に置いていたため、「チャレンジ力」を育む単元構想計画が不十分であったのではないかと。

②年間指導計画作成時において、「チャレンジ力」向上のための活動設定が不足していたのではないかと。

③コロナ禍において、児童間の言語活動の量や質が限定的になっていたことも一因かと。

◆「海外で活躍する日本人との交流」について

コロナの影響により、残念ながら実施することができなかった。しかし、子ども達には、多様な人と関わり、貴重な経験を聞くことは、「つながり力」の向上のみならずキャリア形成を育む上で重要なことであると考えるので、次年度は実施できるよう計画していきたい。

(2) 今後の展望

・「つながり力（特に話すこと）」「チャレンジ力」を育むべく、次年度の年間指導計画にその力を育む単元や場面を明確に位置付ける。さらにその各単元や行事をシームレスにつなげるために、ICTを活用していく。

・つながり力やチャレンジ力のさらなる育成、3つの力の第三の柱である「自分発見力」の育成、さらには児童自身が考える「めざす姿」に迫るためにも、ICT活用によるキャリア教育の取組と日常的活動の「融和」を図る。それにより、めざす自分（キャリアパスポート）やその成長（生き方アンケート）を児童自身が実感する環境づくりをめざす。

手法として例えば、各児童用 iPad で写真機能や Microsoft forms や Excel などを活用し、キャリアパスポートやアンケートの記録をデジタル保存したり、その成長がわかる表やグラフなどを作成したりして、児童自身がいつでも確認し意識できるようにする活動などの取組を進めたい。

・多様化、グローバル化する社会において、「多様な」つながり力育成のためにも、海外で活躍する日本人との交流の場を計画したい。

7. おわりに

まずは、本研究を進めるに当たって、研究の展開のための重要な気づきを与えていただいたオンラインサポーターの木原先生、そして先進的な実践や具体的な事例をご紹介いただいた小林先生にお礼を申し上げたい。

本報告書をまとめるにあたって、研究開始時（4月）を振り返ると、当初の正直な心情としては、どの程度校内職員を巻き込みながら研究を進められるだろうかと不安な点があった。しかし、本校職員の全面的な協力に加え、本校の良さである「とにかくやってみよう！」という雰囲気の中、実践を積み重ね、本研究が着実に前進していることは大変嬉しく思う。

コロナ禍であったからこそ、ICTを活用した実践が進んだことは言うまでもないが、この機会をチャンスと捉え、具体的に多く実践に校内で取り組めたことや、自身がそれに関わって微力ながらも寄与できたことは、とても素晴らしい経験となった。

過疎化が進む社会において、本校のような地方の小さな町で取り組んでいる実践研究を、都道府県の枠組みを超えて発信することは、大きな意義を感じる。日本全体の教育が少しでも前に進むことを願って、今後も実直に研究に取り組みたい。

8. 参考文献

・東京都世田谷区立尾山台小学校「小学校だからこそ！キャリア教育！世田谷区立尾山台小学校の挑戦」